

4 竹原市横大道古墳群と古代山陽道

菱田哲郎

竹原市新庄町に位置する横大道古墳群は、大型の横穴式石室を内包する1号墳や2号墳を擁し、また銅鏡を副葬品にもつ8号墳もあるなど、地域における有力な勢力の墓地と目される遺跡である。今年度、京都府立大学文学部歴史学科のフィールド実習に際し、市指定史跡でもある横大道古墳群を考古学分野の対象とすることとした。横大道古墳群の位置する竹原市新庄は、近世の山陽道が通っており、早くから山陽道都宇駅の所在地と目されてきた。こうしたことから、交通路と古墳立地の関係をさぐることを実習のテーマとして掲げることとした。

横大道古墳は横大道の東北にある鷲の森山の麓に点在しており、大型の横穴式石室（全長9.4m、玄室長4.9m、幅2.0m）をもつ1号墳は、その西端に位置している。1号墳と2号墳の墳丘がほぼ接していることから、2石室1墳丘で、前方後円墳の可能性も指摘されている（脇坂2013）。ただし、2号墳の墳丘高が1号墳と比べて著しく低い点が課題であり、典型的な前方後円墳である岡山県こうもり塚古墳や広島県二子塚古墳などとは懸隔が大きい。

横大道古墳群の形成を考える上で、1号墳の帰属時期が問題となる。『竹原市史』において調査資料の報告とともに6世紀後半という位置づけをおこなっており、今日から見ても大過ないと考えられる（藤田・本村1963）。ただし、須恵器の変化について高杯の短脚化を重視することから、奥壁付近の短脚高杯が羨道の長脚高杯に遅れるとした見解は改めるべきであろう。両者が併存することが知られるようになっており、杯部の形態に着目すると、むしろ奥壁近くの短脚高杯に古い様相がみられる。在地的な特徴が発現する時期であり、畿内の陶邑編年と直接比較することは躊躇されるが、TK43型式に似た杯部形態とみることができる。こうした点から、一応6世紀後葉を横大道1号墳の築造時期として考えておきたい。

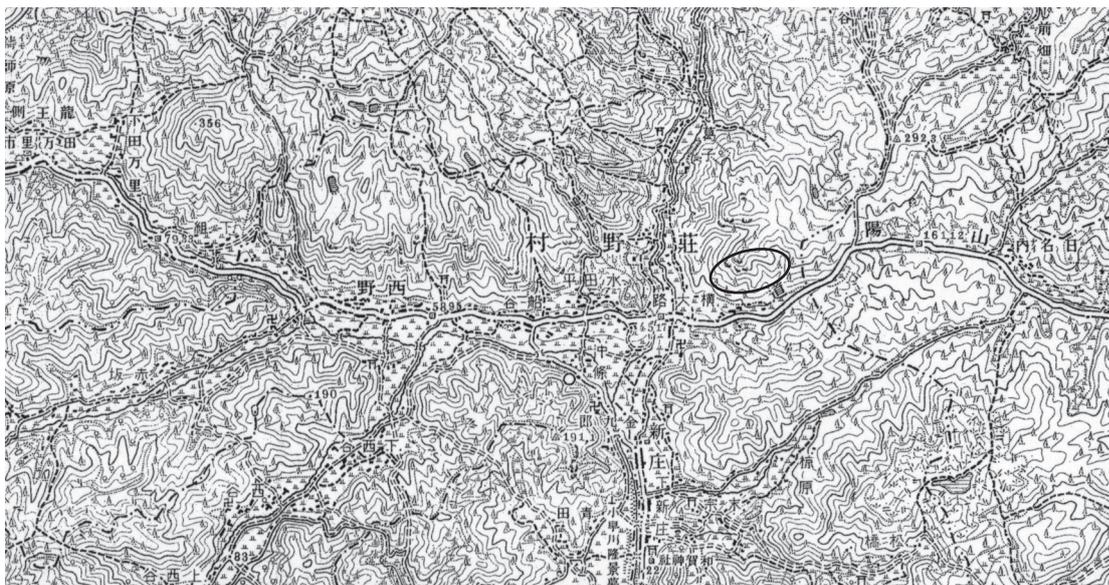


図1 横大道古墳群の位置と近世の山陽道（明治31年測図5万分1地形図「竹原」）

横大道1・2号墳の立地は、鷲の森山の西南麓にあり、新庄地区の盆地を見下ろす位置にある。この場所については、古くから山陽道都宇駅の所在地として擬せられてきた。これは、横大道古墳群の南の谷を東西に抜ける江戸時代の山陽道が古代山陽道を踏襲するという見方による。ただし、中世山陽道はこの地を通らず、三原市本郷から東広島市高屋に抜けるルートをとっており、古代山陽道については、安芸東部のルートは明確にはなっていない。この点については、本書の竹内論文に譲るが、むしろ横大道古墳群の存在が、古代山陽道のルートを考える上でも重要な役割を果たすのではないかと考えられるので、少し検討してみたい。

近年、山陽地方の大型横穴式石室が古代山陽道を意識した立地をとることが注意され、山陽道そのもの、もしくはそれに先行する交通路が古墳の時期まで遡ることが主張されている（広瀬2013）。崇峻5年（592）に駅使を遣わして天皇の訃報を筑紫の將軍府に伝えたとする記事からは、のちの駅伝制のような情報伝達のための陸上交通の整備が6世紀まで遡ることが示唆される。ただし、律令期の山陽道は幅が9～12mもあり、直線的なルートで、かつ16km程度ごとに駅家を置くというすぐれて精緻な交通体系であるが、それがそのまま6世紀に遡ると考えることは実際的ではない。律令期の官道の完成には、それなりの段階をたどりながら7世紀を通して達成されたと考えるのが一般的であろう。そして、駅使の記事あるように、6世紀のある段階からは情報伝達の役割を陸路が担ったことも重視すべきである。このような交通に対する供給機能を各地の豪族たちが果たしたことが想定され、大型横穴式石室をもつ古墳が交通路を意識した立地をとることも、交通への供給機能を表象している可能性がある。

山陽道沿いでは、備中のこうもり塚古墳や備後の二子塚古墳が山陽道沿いの大型横穴式石室墳としてもっとも典型的であり、ともに6世紀後葉の築造年代が推測されている。そして、駅家との関係がうかがえる場合もしばしばあり、備後の二子塚古墳が品治駅、迫山1号古墳が安那駅の近くにあり、安芸国では梅木平古墳が梨葉駅の近くにあたと想定される。8世紀の駅家と6世紀末頃の古墳の立地が一致することは、単なる偶然と捉えられるかもしれないが、駅家が屯倉を引き継ぐ可能性が示唆されていることを念頭に置くと、屯倉の交通機能に関わる豪族たちの墓が結果として駅家の近くにあるという理解は可能であろう。以上から、6世紀後葉に築造された横大道1号墳がプレ山陽道を意識した立地であり、都宇駅もその足下にあった可能性が高いと判断される。横大道古墳群の被葬者が都宇駅の前身となった施設、おそらくは屯倉の経営とも関わっているとみることが、8号墳の銅鏡をはじめとする豊富な副葬品の入手過程を考える上でも示唆的である。このように横大道古墳群は、古墳時代後期の有力者の墓というだけでなく、竹原市新庄地域の重要性を浮かび上がらせる貴重な史跡であると言える。

フィールド実習および補足の調査を通して竹原市教育委員会の三輪宜生氏にたいへんお世話になった。記して謝意を表したい。

参考文献

- 広瀬和雄 2013 「終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』179集
菱田哲郎 2020 「大型横穴式石室と交通」『横穴式石室の研究』同成社
藤田等・本村豪章 1963 「竹原周辺の考古学的考察」『竹原市史』2 竹原市
脇坂光彦 2013 「横大道1・2号墳の測量調査報告」『芸備』43集